

最近の中国事情

―学問・政治・文化管見

西田 毅
(大学法学部教授)

一、北京日本学研究所センター派遣教授として

北京の日本学研究所センターで日本思想史の講義を担当するため、昨年の八月から十二月末まで国際交流基金から派遣されて北京に滞在した。中国へはこれで五回目、北京には四回目の訪問であるが、北京での長期の滞在は今回が最初の経験になる。

首都空港に降り立ったとき、気温は摂氏三四度の猛暑で北京の夏も暑いと聞いてはいたが、乾燥したカンカン照りの真夏の太陽には閉口した。しかし、夜になると二〇度位の気温で快適な涼風が吹いて気持ちよかった。宿舎は頤和園や北京大学に近い海淀区にある友誼賓館の長期滞在者用の「頤園公寓」に定められた。私の部屋は南と東側に大きな窓とベランダ付きの掃き落としのガラスのドアがあり、四階なので見晴らしも良く、南側の北京理工大学に通ずる道路に植えられた白楊の亭々たる大樹の緑の梢にそよぐ風情が何とも心地良かった。

日本学研究所センターは北京外国語大学のなかにあり、国際交流基金と中国の国家教育委員会(文部省)が共同運営する研究

機関である。センターは現在、言語、文学、社会、文化の四コースがあつて、定員枠は一学年全体で二十人とその数が国家教育委員会によつて決められている。私が担当したのは文化コースの学生たちであつた。彼らの日本語能力は、既に学部で履修しているのが堪能であるが、語学の能力に比べて専門の知識に欠けるきらいがあつた。私は三コマ受け持ったが、演習クラスでは、中江兆民の『三酔人経綸問答』と新島書簡集の抜粋をテキストを選んで講読した。彼らは大学院生であるが、中国の大学ではゼミナール式の授業がないので、演習に慣れない学生たちははじめは緊張していたが、すぐに慣れて積極的に討議に参加してくれる鋭い質問を発するようになった。

唯、テキストの同じ箇所を二人の学生が担当して、それぞれ内容の紹介をして意見を述べあいながら史料の文脈の理解を深めるといふ手法に、なぜ同一の文章を二人が……という疑問を抱いたらしい。しかし、兆民の民権や国権、ナショナリズムの捉え方の深さを理解する方法として、異なった意見やコメントを発表しお互いに論評することが、独善的な文献の解釈に陥らな

い確かな内容の理解に役立つことが、彼らに納得できたようだ。そのことは、講義終了後の感想文に書いてあった。さらに、明治の思想や政治状況を追体験することの意味、イデオロギー的な先入見や事後からの正当化を排除して、できるだけ客観的に歴史を認識することの大切さ、恣意的な文献解釈の危険性、歴史における「存在拘束性」と想像力の問題等々、兆民と新島のテキストに即して学習に努めた。しかし、彼らがどの程度理解してくれたか、教育上の効果については分からない。

日本思想史の講義を進めるなかで、日中両国のカルチュアや歴史認識のギャップを感じたことがしばしばあった。たとえば、明治の知識人（知識分子）の評価の問題であるが、明治政府の体制内知識人（官僚層を含む）と野にあって権力と一定の距離をおきながら、批判精神を堅持しつついはは是非々の立場で言論活動を続けるタイプの知識人、そして、反体制的な革命家や社会運動家の存在様式を日本の近代化やナショナリズムの問題との関連でトータルに把握させることがむづかしかった。清末の政治改革運動や辛亥革命、革命後の政治的混乱の力学の知識がもつと彼らにあれば、日本と中国の比較の視座から天皇制国家と知識人の問題についてより深い理解ができたであろう。キリスト者や社会主義者の天皇制国家に対する愛憎、批判と妥協といったアンヴィバレントな態度や権力への妥協と屈伏の心理的な変容の過程を語るのに悪戦苦闘した。方法としての比較の重要性を改めて痛感した次第である。

二、「改革開放」と社会主義「精神」の堅持

私が北京に赴任してまもなく、九月に入つてすぐ、中国共産党第十五回全国代表大会が人民大会堂で開かれた。九月十二日には江澤民国家主席が「高挙鄧小平理論偉大旗幟把建設有中国特色社会主义事業全面推向二十一世紀」と題する詳細な席上報告を行った。その内容は翌十三日付の『人民日報』で報ぜられたので、私は辞書と首つ引きで記事を読んだ。この報告は直ちに人民出版社から小冊子で出版された。大会の前後に各職場単位でこの報告書を資料に学習活動が大々的に展開されたようである。私も日本学研究センターのある教室で北京外大共産党委員宣伝部が編集した「迎接党的十五大勝利召開」（学習材料編集）や関連資料としての「学習江澤民總書記在中央党学校重要讲话專輯」（九七年五月の講話記録）等のパンフレットを見た。もちろん、それは大学の党委員会宣伝部が編集した職場（工作单位）の討議用資料なのであろう。

江澤民報告では、現政府が推進する改革開放路線や特色ある社会主義建設の本身について詳細に述べられている。政治システムについては「集会的領導」という名称で共産党の役割が強調され、党の指導の下に「依法治国、發展社会主义民主政治」、「工人階級領導」制、つまり、「工農連盟」の「人民民主專制」を堅持するとうたっている（「依工農連盟為基礎的人民民主專政」）。また、現在の中国は未だ初期社会主義の段階にあると規定しており、今、掲げている目標（経済と科学技術の發展、社会主義民主政治の完成）を達成するには百年かかるとしている。

そして今世紀の偉大なリーダーとして孫文、毛澤東と鄧小平の三人をあげてそれぞれの功績を述べたあと、今は鄧小平の理論を高く掲げて国家の建設に邁進することが大切だと結んでいる。

私は「集合的領導」や「工農連盟」（労働同盟）、「人民民主專制」等の言葉に、昔、学生時代に読んだ毛澤東の「人民民主主義独裁について」（一九四九年）や毛澤東憲法とも呼ばれる中華人民共和国憲法（一九五四年制定）の幾つかの条文を思い出した。そして、毛澤東や劉少奇ら建国時のリーダーの社会主義思想との関連性を意識せずにはいられなかった。すなわち、毛澤東がソビエト型のプロレタリア独裁とは異なる支配の様式として打ち出した「人民民主專制」（労働者階級、農民階級および都市の小ブルジョワジーの同盟、なかならず労働同盟を重要な基礎とし労働者階級と共産党の指導による支配体制）、あるいは「人民民主独裁」（人民の内部に対する民主的な面と反動派に対する専政的な面）を結合した政治支配、そして、最高の国家権力機関である全国人民代表大会を通じて統一的集中的に政治支配を行う「民主集中制」の理論的継承を印象付けた。毛澤東がいう「民主集中制」とは何か。それは単なる中央集権制の謂ではなく、権力機構に対する人民の批判の自由に基づけられた政治支配であって、新中国創建当時の毛澤東や劉少奇らには、民主の基礎の上に人民の政治的コンセンサスの形成が可能であるという楽観的な思想があった。しかし、その後の激動の半世紀のあいだに建国時の政治的原則が大きく変化したことはいうまでもない。このような歴史の実験のなかで経験した政治言語



万里の長城（慕田峪）で。复旦大学 徐静波氏と筆者（右）

の意味変化と無関係に建国当初の政治用語がそのまま用いられている他の例として、歴史の発展段階からみた現代中国の性格規定があげられる。江澤民は現代中国を未だ初期社会主義に属すると規定しているが、それは、一九五四年憲法に中国を社会主義への過渡的国家と位置付ける規定と符号する。一方で社会主義的市場経済体制の建設を説き、香港の「回歸」に伴う「一

国二制度」の主張や特色ある社会主義の建設といった現代中国の課題を強調する政府が、こと国家の規定や政治支配の方式については、伝統的、古典的ともいえる新中国創建当時のタームをくりかえし強調する態度をどう理解したらいいのかという疑問が浮かび上がってくる。

政府が「近代化」政策を推進する過程で生じた階層間の所得格差、党官僚制の腐敗現象、沿海部と内陸部の地域間格差等、さまざまな矛盾を是正するために、政府は社会主義の「精神」教育の強化や愛国心の涵養など引き締め策に苦慮している。いわゆる拝金思想の排除や功利主義批判は、普段、どこにでも見られるスローガンである。しかし、最近の高い経済成長率は、国民のあいだに価値の多元化をうみだし、彼らは一層の豊かさや生活の利便さを求めて、「西方的自由」や外界の情報に敏感になっている。

言論の自由や政府批判の問題についていえば、政府が主張する「社会主義民主政治」とは裏腹に、天安門事件を語ることは依然としてタブーである。マス・メディアに対するコントロールもみられる。私の宿舎のテレビは衛星チャンネルでアメリカのCNN放送を見ることができたが、ある時、訪米中の江澤民が大統領と会談した時、クリントンが天安門事件を取り上げて厳しく批判する一幕が放映された。しかし、CCTV（中国のテレビ）でその場面は報道されなかった。また、イギリスのダイアナ妃の交通事故死も一切テレビで放映されなかった。それは、CNNが朝から晩まで一日中、ニュースを流し放しであったのと好対照であった。そして、数日後の『人民日報』に、漸

くダイアナの死を報ずる短い記事が載り、西洋のマス・メディアの自由（西方式的「新聞自由」は商業主義的利益の追求と結合した「残酷的『自由』」であると論評していたのが印象に残った。

三、古都散策

九月から十月にかけての二カ月は、毎日、快晴が続き雨が一滴も降らなかった。空は抜けるように青く高く澄み、まさに「北京秋天」の形容がピッタリの好天が続いた。毎朝、ルームサービスにやってくる男性の服務員に「今日は秋高气爽の好天気」と紙切れに書いて見せたら、その通り、といいながら、何度も丁寧私の発音を直してくれた。

センターが主催する国慶節旅行で山西省の太原・平遥・壺口瀑布への四泊五日の中国古代文化のルーツを探る旅は今回の中国滞在中のハイライトであった。臨汾近郊の丁村民俗博物館や古代の伝説王堯廟、激流逆巻く大黄河の壺口瀑布、春秋戦国時代から続く古都平遥の城壁の佇まい、清代の大商業金融資本家喬家大院、省都太原と晋祠の旅情はどれ一つ取り上げてても中国悠久の歴史散歩の格好の主題である。私が彼の地で歴史の重みに圧倒された思いをここで書く余白も余裕もない。それは、いづれ別の機会に譲ることにして、ここでは、北京散策の一端を記して紀行文に代えたい。

北京近郊の名所といえば、長城や明の十三陵はお決まりの観光コースで、私も数回それら代表的な観光地を見る機会があった。故宮博物院も含めてこれらの観光地は外貨稼ぎの目玉商品

ともいうべき場所で、いつ行っても観光客で混雑していた。故宮は建物の壮大さに比べて、見るべき宝物はすべて台湾に持ち去られていると聞いていたが、宝物館（清朝の珍宝館）には、古代から近代にかけて発掘されたり、皇帝や貴族が集めたコレクションが山のように陳列されていて、見て回るのに疲れるほどの分量がある。私はR・F・ジョンストンの『紫禁城の黄昏』を片手に乾清門以北の旧内廷部分、溥儀ゆかりの養心殿や乾清宮、坤寧宮、御花園のあたりを歩いてみたが、大勢の群衆に押されながらの観光では特別の感興も湧かない。西太后ゆかりの有名な珍妃井も観光客で一杯であった。

十一月のある晴れた日、妻と二人で西直門から地下鉄に乗り「鼓楼大街」まで行き、そこから旧北京市街の胡同（フートン）がひろがる町並みを歩いて鐘楼と鼓楼を見に行った。両方とも元代や明代に建てられた歴史的建造物で、急な階段（七十五段あった）を上りつめるとそこには五百年前の大鐘（中国最大の古鐘）があった。鐘楼のすぐ南に鼓楼があり、最上階にはポロポロになった昔の太鼓が置いてあった。かつて、城内の人々に時を告げた鼓である。鼓楼の位置は現在の北京旧城内では北に偏しているが、元代にはちょうど町の真ん中に当たる位置なのだそう。屋上から眼下にひろがる旧市内をみわたすことができた。そこは、旧北京城壁に囲まれた「老北京」のほぼ中心部で、胡同が大分、変形してきつつあるとはいえ、よく原型を留めていた。晩秋のにびいろの陽光につつまれた四合院の連なる町には、市民の落ち着いた生活の匂がたちこめている。私は幾度もの歴史の激動をこえて息づく悠久の古都の佇まいを実感

した。二人はその後、通りを南に向って景山公園の裏手まで歩いた。胡同の中で道を見失ったり、道端で売っている山積みのお菜を見たり、羊の串焼きの屋台をのぞいたりしながら、ゆつくりと散策を楽しんだ。行き交う人々の眼差しは、時に優しく、時に鋭く、あふれるような活力と猥雑さがないまぜになった下町の風情があった。

日本学研究センターの学生K君の案内で宋慶齡の故居を訪ねた日のことも忘れられない。宋女史の旧居は德勝門近くの后海に面する閑静な地にあった。彼女の家は元清朝皇帝醇親王の私邸跡、たしかここで宣統帝溥儀が生まれたところだ。女史の生涯を記念して今は博物館として公開されている。室内には、彼女の波乱に富む生涯の事績が写真やパネル、多数の遺品で紹介されている。それらの展示品を見ながら、改めてこの一世紀の中国の歴史を思った。女史もこの国の人民も大変な時代を経験したのだ。宋慶齡自身は一九一五年に二十二歳で二十七歳年上の孫文と結婚、十年の結婚生活で夫と死別、そして孫文の遺志を継いで激動の半生を送った。最後は国家副主席という名誉職に就くが、多くの時間を恵まれない子供たちの福祉活動に捧げた。子供たちから女史に送られた絵や文字が展示されており、彼女の暖かい人柄を慕う気持ちがよく表れていた。大実業家宋耀如の二女に生まれた彼女は、のちに蒋介石夫人になった美齡の姉にあたる。戦後は妹との交信が途絶えた。毛と蔣の政治的対立が二人の肉親としての関係を切断してしまったと考えられるのであるが、旧居の優雅な庭園を歩き回廊をめぐりながら、しばし、変転目まぐるしい女史の運命に思いを馳せたのである。